



明治の移住者

フリーライター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。

明治以降、林野を開墾^{かいこん}し、農業で生計を立てようとする人が大勢、北海道に入植しました。その中で、地域の発展に大きな役割を果たしたのが、高い志やすぐれた見識を持った人物です。帯広市には依田勉三、陸別町には関寛斎、せたな町には萩野吟子の銅像が建てられ、後世にその功績を伝えています。

依田勉三 土地も像も私財投じて

「帯広開拓の祖」といわれる依田勉三は1882年、晩成社を設立、翌年には帯広に入り、豆類などを栽培します。その後、大樹で豚や牛を飼育し、ハムやバターなどを生産しますが、販売不振で思うように成果は上がりませんでした。しかし、その努力が今日の十勝農業を築く礎^{いしずえ}となったのです。

この功労者が顕彰されないことに不満を抱いたのが中島武市です。中島は岐阜県の農家に生まれ、北海道へ渡ったのは1916年。行商人として道内各地を回り、岐阜県出身者が多い帯広に定住し、1919年にまんじゅう屋を開店します。その後、古着屋などさまざまな事業に手を広げました。

ここまでは一代で成功するほかの事業家とさほど変わりませんが、中島が異色なのは蓄財に執着しなかったことです。郷里には神社参道、仏閣、二宮尊徳像、地元の帯広神社には神馬、帯広・十勝の学校には尊徳像など寄付を惜しげもなく続けました。銅像だけでも約50体に上ります。

その原点にあったのは、小学校時代の校長の口癖でした。自伝によると、校長は児童に地元の尊徳像や記念碑などを案内し「世の中に出たら死んで名を残すような仕事をしなけりゃいかん。人は一代、名は末代じゃ。金はきたなく貯めても社会公共のためきれいに投資することを忘れるな」と説いたのです。

中島は「寄付も事業の一つ」という信念を抱き、これを実践するため、自らを鞭打って働きました。1937年には、北海道移住20年を機に「人生上の巻完成記念」と銘打った宴会を開きます。その席で、記念事業として依田勉三の銅像建設を広言しました。



開拓当時の姿を再現した依田勉三像

建設場所は国道を挟んで帯広神社の向かい側の土地。2人の土地所有者を説き伏せ2万円で購入し、銅像の建設費5万円は無尽からの融資で賄いました。除幕式の費用や雑費を含めると、総額は11万円に達しました。

1941年6月22日の除幕式で現れた像は、みの笠をまとった開拓当時のりりしい姿です。その格好は中島が制作者の田嶋碩朗に強く望んだものでした。銅像と土地を帯広市に寄付したことで、市はこの地を「中島公園」と命名します。

ところが、戦況が悪化し、銅像は建立から2年後の1943年12月、金属回収の憂き目に遭います。戦後、中島は再建に動きだしますが、復興途上の厳しい経済状況の中、さすがに全額を賄う余裕はありませんでした。

1950年7月、佐藤亀太郎市長を会長とする再建期成会が発足、自ら50万円を拠出し、総額230万円で再建にこぎつけます。銅像を制作した田嶋はすでに亡くなり、新たに依頼したのは横江嘉純でした。

1951年7月1日、除幕式が行われ、残された台座の上に再び登場した像は、初代と同様、みの笠を着け、クワを立てた農夫姿です。碑文は台座とともにそのまま残されたため、建設者として中島の名が刻まれています。



中島公園の名は寄贈者に由来しています

中島は帯広商工会議所会頭や市議会議長を務め、地元の名士として貢献しました。一方で「野心家」という評判も立ちましたが、「野心大いに結構。願わくば大きな野心をもって、社会公共に寄与し、自己を完成するため、常に人間を磨くことを忘れない」ことが一番大切だと自伝で述べています。

その結果、1965年には郷里の岐阜県糸貫町（現本巣市）、1975年には帯広市内の本願寺帯広別院に中島の胸像が建立されました。中島にとって、銅像で恩返しされることほどうれしいことはなかったでしょう。

中島の長男真一郎は帯広で開業医となります。その長女が美雪。シンガーソングライターとして活躍する中島みゆきです。

本人は銅像の建設者として名を残し、孫は後世に残る名曲を紡ぎ出しています。まさに「人は一代、名は末代」です。

関寛斎 風雪に耐える姿を創造

長崎で蘭医学を学んだ関寛斎は徳島藩主に仕える医者となり、戊辰戦争では各地を回り負傷者の治療に当たりました。その後、徳島で開業しますが1902年、北海道開拓の計画を立て、72歳で厳寒の地、陸別に入植します。

高齢にもかかわらず、クワを握り開墾に励む一方、医師として地域住民の診療にも当たります。当時、陸別に開業医はいませんでした。

農家の息子だった佐川一徳は3歳のころ、父に背負われ寛斎の元へ風邪の治療に通いました。寛斎は父に「この子は、胸が弱いから、一生胸の病気で苦しむかも知れん。栄養のある物を食べさせて、育てなさい」と言ったそうです。

佐川にとって寛斎は命の恩人でした。やがて感謝の気持ちを銅像にしたいと思うようになります。趣旨に賛同した町内の有志が行動を起こしたのは1978年。この年は開基60年に当たることから、記念事業にする機運が高まります。

同年2月には期成会が発足。寛斎は晩年、寛という名を使っていたことから、名称は「関寛翁ブロンズ像

建立期成会」としました。会長には木材会社社長で自治会連合会会長の金沢賢蔵が就任、佐川は副会長を務めます。

除幕式は開基60年記念式典が行われる9月23日とし、制作は陸別で育った帯広の中学教師、小室吏おさむに依頼。予算は400万円で全額寄付に頼ることとしました。

発案者の佐川は農家を一軒一軒訪ね、趣旨を説明し寄付を募りました。期成会の呼びかけに応えた町内外の1,539人から目標を上回る580万円が集まります。このため、銅像のほか「開拓のあけぼの」と題する開拓小史も刊行することができました。

小室は「風雪に耐えて立つたくましさ」を表現するため、期成会のメンバーと検討を重ねた結果、左手でクワを握り、右手を前方に差し出す果敢なポーズにたどり着きます。「寛齋は単なる農民ではなく、医者で歌人でもあったから、強い意志を持った人物像に仕上げたかった」というのです。

除幕式を月末に控えた9月7日、作家の司馬遼太郎が寛齋について取材するため陸別を訪れます。その当時、司馬は寛齋が登場する歴史小説「胡蝶の夢」を新聞に連載していました。



陸別町のシンボルとなっている関寛齋像

本来なら8月末には銅像が設置されるはずでしたが、埼玉での鑄造作業ちゆうぞうが遅れ、まだ到着していませんでした。完成前の石こう原型の写真を見せられたのでしよう。司馬は「街道をゆく」シリーズの「北海道の諸道」(朝日文庫)にこう書いています。

「予定されている像は、七十翁が瘦身にもめん筒袖の着物をまとい、腰から下を伊賀袴はかまでつつみ、くわ鍬をななめに立て、若いころの写真よりひとまわり小さくなった顔を心もちあげ、かなたの雲をながめている。人間と神仙のあいだのような感じが出ていて、わるくはない」

除幕式は雲一つない秋晴れ。会場の「緑と太陽のひろば」では、寛齋の子孫や開拓の3代目、4代目となる子どもらが幕を引きました。白布から現れた寛齋の右手は自らの入植地、とまむ斗溝の方角を指していました。

その後、1993年5月には、道の駅「オーロラタウン93りくべつ」内に関寛齋資料館がオープン。2004年11月には、資料館近くの多目的広場に寛齋像が移設されました。

荻野吟子 道医師会長の驚きが契機

わが国初の女医、荻野吟子は1885年の医術開業試験に合格し、東京で開業します。1890年キリスト教伝道に燃える志方之善しかたゆきよしと結婚。1894年に来道し、今金で夫の理想郷建設のため開拓に協力します。しかし、事業はとん挫し1897年、瀬棚に移り医院を開業しました。

1964年4月から始まったNHKのテレビ番組「風雪」は、明治維新からの出来事を毎週1話完結でドラマ化していました。同年10月29日に放送された吟子が主人公の「女医記」を見ていたのが、北海道医師会会長の松本剛太郎です。

女医第1号は別の人物だと思っていた松本は、この番組で吟子が初の女医であることを知ります。その後、調べていくうちに、瀬棚町(現せたな町)で開業していたことも分かりました。

心をつかまれた松本は1955年から10年間務めた会長を辞し、1965年からは吟子研究にのめり込みます。と同時に顕彰碑建設の構想を練り、1966年秋には瀬棚町

を訪れ、町長の小沢栄吉と計画を推進することで合意しました。

吟子の業績を医師仲間に広く伝え、寄付を募ることが必要だと考えた松本は、北海道医師会の機関誌「北海道医報」第169号（1966年10月16日）で吟子についての座談会を企画します。

興味深いのは、松本が終盤になり「ところで荻野吟子女史を顕彰したいという話がありますがどうでしょう」と切り出す場面です。顕彰碑建立へと話が発展しないことにしびれを切らしたのでしょうか。最後には「資金の捻出に苦労があるようです。医師会にも大いにバックアップしてもらわなければならないでしょう」と本音をのぞかせました。

また松本は研究の成果を1967年の「北海道医報」に4回連載しています。これを当時、札幌医科大学に勤務していた作家の渡辺淳一が当直室で偶然見つけ、後に「花埋み」という小説が誕生します。

1967年2月には荻野吟子女史顕彰碑建設期成会が発足、会長には瀬棚町長の小沢、副会長には北海道医師会会長の斎藤義太郎、北部松山医師会会長の平進が就きました。予算総額は関係者に配布する吟子の小伝を含め379万円。事務所は瀬棚町役場ですが、札幌の北海道医師会には連絡事務所を設置しました。



石塔に囲まれる荻野吟子像

制作したのは札幌在住の彫刻家本田明二^{めいじ}。松本の次女伸子が画家だったため、芸術仲間として以前から松本家に入入りし、松本の信頼を得ていました。

すでに1966年の初冬には松本と瀬棚を訪れ、現地でも打ち合わせをしています。「瀬棚の旅館で、夕食後『本田君、しっかりたのむよ。いいものを作ってくれよ』、と細い眼に信頼と期待をこめて言われたのは忘れ難い」と回顧しています。

顕彰碑は吟子の開業地跡に建設されました。和服姿の胸像のほか、その両脇と背後の三面を囲む形の石塔を設置。高さ6^{メートル}の塔の上部にクリスチャンだった吟子を象徴する十字架を刻み、その下には彼女が好きだった聖句を掲げました。

また「荻野吟子女史顕彰碑」と揮毫したのは松本だと碑石の裏側に記されていますが、実際に書いたのは妻の春子だったようです。春子は当時、北海道のかな書道界の指導者として活躍していました。同じく書家で三女の暎子は「確かに母の書。元々は縦書きに書いた文字を横に組み直したのではないか」と推察しています。

除幕式は1967年8月20日に行われ、吟子の養女が幕を引きました。つつましく像を見つめる松本は、よろこびと満足の表情にあふれていました。そして、念願だった顕彰碑の完成を見届けてから半年後、病に倒れ77歳で永眠します。

町はその後、旧国鉄瀬棚駅跡地を「荻野吟子公園」として整備し2000年6月、胸像を移設、老朽化した石塔は新築しました。

さらに2001年には吟子生誕150年を記念し、吟子が生まれた埼玉県妻沼町^{めぬまち}に隣接する熊谷市の野口石材店が洋服姿の石像を町に寄贈、同じ公園内で6月28日、除幕式が行われました。

（敬称略、肩書は当時のもの）

<参考文献>

- ・ 井浦徹人「波瀾に富む五十年 中島武市の半生史」藤丸百貨店書籍部、1955年
- ・ 陸別町広報広聴町史編さん室「陸別町史」陸別町、1994年
- ・ 松本春子編「松本剛太郎」松本春子、1970年
- ・ 北海道立函館美術館ニューズレター「ハコビニュース」7号、2003年